

# らい 来ぶらり 23

## 東洋文化研究所 & 大学史料館

学習院大学にはいくつかの付置研究所があるが、学生はほとんどその実情を知らない場合が多い。そこで今回、上記の2つの研究所についての紹介をしたいと思います。――

東洋文化研究所？ どこにあるの？

残念ながら学部3年次以下の一般の学生にとって、東洋文化研究所はあまりなじみのないところのようです。4年次になるととたんに知名度が上がるのは、北1号館4階、すなわち就職部の上にあるからでしょうか。

そこで今回、この誌面をお借りして、東洋文化研究所について、若干の紹介をさせていただこうと思います。案内役は私、深津と申します。

まず簡単な歴史からご紹介しましょう。

東洋文化研究所は1952年、当時学習院院長であった安倍能成氏の発起により、学校法人学習院の付属機関として設立されました。当初は図書館の2階に仮住まいし、主事に委嘱された末松保和教授の専門分野でもある朝鮮関係の資料の収集と普及を活動の柱としました。1953年には『李朝実録』、1960年には『学東叢書』として『三国史記』等、『李朝実録』以外の重要文献の刊行に着手し、1975年には『朝鮮史関係所蔵図書目録』を刊行、いずれも学界に大きく寄与しています。

以上を当研究所の活動の第1期とするなら、1976年規定が改新され、学習院大学の付置機関となつてから現在までの活動を第2期としてまとめることができます。研究対象地域は朝鮮のほかにも中国、東南アジア、オセアニア、日本等を加え、本学学長に委嘱された研究員を中心に学部、学科の枠にしばられない、グローバルな視野に立った、プロジェクト制による研究がすすめられてきました。

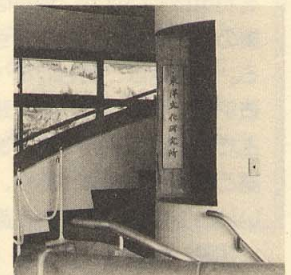
1979年、研究所は現在の場所に移転し、1980年度からはプロジェクトは公募制となつて、その成果は『調査研究報告』として刊行されています。現在進行中のプロジェクトは以下の7つです。

- ▷ 「アジア宗教儀礼の比較研究」
- ▷ 「総力戦下における〈満州国〉の研究」
- ▷ 「アジア・太平洋地域における社会経済開発政策と国際関係」
- ▷ 「戦後における日韓政治文化摩擦の比較研究」
- ▷ 「近代化過程における朝鮮の思想と社会の研究」
- ▷ 「日本語・朝鮮語・モンゴル語・タミル語の比較文法の研究」
- ▷ 「中国における科学・技術教育の現状に関する調査研究」

このほかに東洋文化講座として年4回の一般公開講座、国際的東洋文化研究に関する会合などを催し、朝鮮語（ハングル）、アラビア語の語学講習も無料で行っています。

いかがでしたでしょうか。当研究所に少しでも興味をもたれた方、アジア近隣諸国への旅行のご予定があるとき、ぜひ一度、就職部の前のらせん階段をのぼりつめてご来所ください。

(東洋文化研究所助手 深津行徳)







**学**習院大学史料館  
〔沿革〕前身は史学  
科史料室といわれ  
たもので、昭和50年  
(1975) 2月、学習院  
大学史料館として開  
館した。その後、学  
内に博物館学芸員資

格取得のための課程が設けられたのにもない、昭和60年(1985) 4月に東京都教育委員会から博物館相当施設に指定された。

〔人員〕現在は柳田節子館長以下、研究員4名、客員研究員1名、助手1名、嘱託3名の教職員から構成され、運営は各学部より選出された運営委員によってなされている。

〔建物〕開館当初は取り壊された旧図書館の書庫を利用していましたが、現在は北別館と百周年記念事業の際に建設された北2号館の一部を利用している。北別館は、明治42年(1909)に建築された木造平屋かわらぶきの西洋建築であり、事務室など主たる日常の活動の場である。北2号館には展示室と収蔵庫・書庫があり、収蔵物に破損を加えないハロン化物による消化施設も設けられている。

〔活動〕仕事は、古文書(和紙などに筆・墨などで書かれた文献史料、ただし図書のように印刷に付されたものではなく、どんな端切れであろうともそれひとつしかこの世には存在しない貴重な文化財)を取り扱い、研究することを中心に行われて

いる。活動は主として三本柱に整理される。

1つは、本館所蔵史料をめぐる活動である。さまざまな方から寄贈・寄託を受けた史料を内容・形態・様式などの面から掌握し、カードを作成して、目録として刊行し、その史料が人間のいかなる歴史的営為を伝えているかを明らかにするという目的を持った活動である。具体的には、ホコリや虫食いのある古文書に向かう地道な作業の積み重ねである。成果は『学習院大学史料館所蔵史料目録』として刊行されている。

2つめの活動は、博物館相当施設としてのもので、展示と実習生の受け入れである。展示は特別展として年1回約1か月間北2号館1階展示室において行うものが主であり、「絵図と絵巻」館蔵史料にみる幕末」などのテーマで行ってきた。実習生の受け入れは、本年で4年目にあたり、参加者がテーマをみつけ、展示を完成させていくというカリキュラムが定着している。

3つめの活動は、研究機関として設定した研究テーマに沿うもので、現在は「旧華族家文書の総合的研究」というテーマのもとに日本各地に残されている旧華族家文書の所在調査及び研究員の先生方を中心に個別実証的な研究活動を行っている。以前は「江戸時代中期における耕地開発の基礎的研究」というテーマで茨城県飯沼新田を研究した。成果は『学習院大学史料館叢書』(史料集)『学習院大学史料館紀要』に発表されている。

(学習院大学史料館助手 須田 肇)

著作権法は著作者の権利(著作権)を保護する一方で、著作物の公正・円滑な利用を図るために著作権を制限している場合もある。複写関係ではまず「図書館等における複製」(第31条)で定められていて、大学図書館等においては以下の場合に自館の資料を用いて複製を行うことができる。

1. 利用者の求めに応じてその調査研究に供するため、公表された著作物の一部分(半分以下。例外として雑誌のバックナンバーの論文に限り全文)を1人につき1部提供する。
2. 自館資料の保存のために行う(全ページ可)。
3. ほかの図書館の求めに応じて絶版等の理由で入手困難な資料を提供する(全ページ可)。

## 著作権法と図書館

もうひとつは「私的使用のための複製」(第30条)で、個人的に使用するために使用者本人が複製することは許されている。ただし、音楽テープ等の複製のために店に備えつけられたダビング機器を用いることはできない。文献複写のためにコイン式複写機を用いることは当分の間許されている。

複写技術の急速な発達により図書館利用者は資料のコピーを入手しやすくなった。その反面で著作者の利益が損なわれようとしている。このような状況の下、図書館も利用者も著作権法の枠をしっかりと守らなければならない。併せて、度重なる複写による図書館資料の損傷についても資料管理上の問題として検討すべきである。(運用係 広瀬淳子)



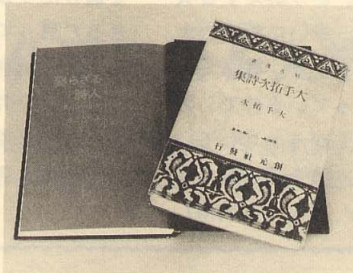
静かな午後のひとときにふさわしい詩集を見つけようと思った。現代詩の書架には、個人の蔵書から、あるいは詩の作者から寄贈していただいた詩集も少なくない。この中から選ぶとすればどの1冊であろう。あれだろう

かこれだろうかと迷うばかりである。そのような時に偶然出会ったのがこの1冊の伝記であった。詩人大手拓次については、今まで名前すら聞いたことがなかったが、伝記の作者生方つゑが北国への紀行に寄せて書いた一文を示して、対象を見る眼の確かさと表現力

の素晴らしさをたたえた女性がいる、以来私は作者の著すものに関心を寄せていた。

作者は既に歌人としても散文家としても優れた人と思われるから、この伝記の書き出しも、散文でありながらまるで短歌をよんでい

娶らざる詩人  
—大手拓次の生涯—



るようである。それだけでもこの伝記は鑑賞に耐えうるであろう。もちろん作者はそれが目的ではない。作者が詩人をどのようなきさつで知ったのか、ほとんど触れられていないので分からないが、北原白秋や萩原朔太郎に認められ、詩壇に影響を与えながらも、広

く世に知られることもなく早世し、顧みられることのない詩人を惜しんで、もう1度光が当てられるように願った書なのである。単なる年代記でもなく、作品の紹介だけでもない。詩人の人となりを背景に、優れた手腕とでも言ったらよいのか、柔らかに、時に鋭く詩

の分析を試みている。決してむやみやたらに詩をいじくり回さずに次々と手品師のように詩を差し出して見せる。叙情詩人の詩はあくまでも午後の光に似て静かである。〔東京美術昭和48年刊〕 (和書係 橋奥雅子)



コンニチワ!

資生堂ビューティー  
サイエンス研究所

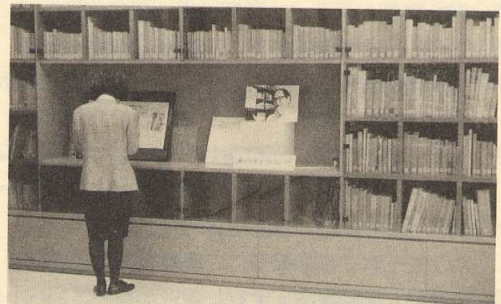
五反田の駅から歩いて5分ほど、資生堂ビューティーサイエンス研究所の一角に図書室があります。ここに文化や風俗の本の収集家である詩人の春山行夫さんが、蔵書の中から化粧や美容に関する約700冊の本を寄贈して、昨年より一般公開されています。〈春山コレクション〉と名づけられたこれらの本は、アクセサリーから風俗史まで12項目に分類されていて、なかには香料の歴史を書いた『The Book of perfumes』(1867年刊)や、美人の標準・化粧法を書いた『La Femme Italienne』(1922年刊)など貴重本が数多くあります。またこ

のコレクションのカタログ『化粧と生活文化史の本』(1987年刊 当館所蔵)も出版されていて、おしゃれの変遷をたどる上で十分な手掛かりとなります。洋書が6割を占めますが、挿絵の美しさに目を引かれ、かつ身近に関心のあることばかりなので非常に興味深く見ることができます。

〔品川区西五反田3-9-1 ☎03(494)1235  
開室時間：10:00~16:00 (予約制・閲覧のみ)  
休室日：土曜・日曜 無料〕

(哲学科3年 藤井亜紀)

整然とならべられた春山コレクション





## 参考室あれこれ

いよいよ卒業論文の作成に拍車のかかる時期に入ったといえるでしょうか。夏休みに入る前は、資料収集のための文献所蔵調査の依頼で参考室にもぎわいをみせました。1800年代の西洋史関係のとくに洋書の所蔵調査では、京都大学に比較的そろっていることが確認できました。この夏、京都まで出向いた人。とりあえず目次のみのコピーの依頼をした人。幸いに都内の大学で所蔵しているところが見つかり、喜んでいったものの、個人の所蔵になっているので、閲覧はできないといわれ、ひどくがっかりしていた人。ほしい資料の多くは国立国会図書館で所蔵していることを確認はしたが、少しでも利用し

やすい近隣の大学で所蔵していないか、と探しまくった人。音楽関係の洋書で専門・学術書とはいいがたいごく一般的な本を探しているため、国内の思いつく限りのところへ問い合わせをしたがみつからず、国外にコピーを依頼しようか目下思案中の人。

いつも思うことですが、所在の確認をしてあっても、早い時期に1度は手に取ってみたり、目を通したりしておくことです。いつでも利用できると思っていて、ぎりぎりになって請求してみると「所在不明」とか「製本中」で断られることが多いのです。またほとんど完成というところまできて、有用な資料の出現で“どうしよう”と考え込むのも悔しいではありませんか。

(参考係 甲斐静子)

## 1年半目の不思議



就職して1年半。洋書の受け入れをやっています。近ごろ、本の形をしたもののほかにマイクロフィルム、フロッピーディスク等の資料も増えていますが、先日購入した本は希少本をマイクロフィルム化して保存し、依頼がある度に複写して売られているようでした。この本はコピー用紙の簡易製本なのでフニヤフニヤして扱えばいい上、開いてみるとすべてのページの端に人の指が写っているのです。原本を撮影する時、押さえていた人の指まで写ってしまったようです。ともかくこの本を注文した先生には一言伝えておかな

いと、1人で研究している真夜中に他人の指が本を押さえているというのは心臓によくありません。「実は…」ああそうですか。どれどれ、これは女性の手ですね。先生は冷静です。この先生も本を撮影したことがあり、足でページを押さえ1人で撮ったということです。つまりその資料には足の指が写っているのです。学者の考えることはみな同じようですが、まだ少々慣れません。(法経図書室 畑村圭紀)

## お知らせ

○大学祭の期間中は休館の予定です。

11月2日(水)から11月7日(月)まで、例年どおり図書館が展示会場になる場合は休館します。ご了承ください。

○「来ぶらりセミナー」に参加しませんか。

今年度第5回目の「来ぶらりセミナー」を次の要領で実施します。

テーマ：やさしい本の仕立て方 —和綴じ本の

実習・コピー類をきれいに—

日時：11月19日(土) 午後1時30分～3時30分

会場：大学図書館3階会議室

定員：20名(先着)

会費：300円(表紙そのほか材料費)

申し込みは11月8日(水)から2階カウンターで受け付けます。参加者のみなさんに実際に和綴じ本を作っていただきます。ふるってご参加ください。

来ぶらり No23 1988年10月1日発行

発行責任者：森永毅彦 編集委員：工藤晶子 北村 誠

学習院大学図書館 〒171 東京都豊島区目白1-5-1 ☎(986)0221